

春望

杜

甫

国破れて山河在り

城春にして草木深し

時に感しては花にも涙も濺ぎ

別れを恨んでは鳥にも心を驚がす

烽火三月に連り

家書万金に抵る

白頭搔けば更に短く

渾べて簪に勝えざらんと欲す

【作者】杜甫（七一〜七七〇年）・盛唐の詩人で李白と並び称せられ、中国詩史の上で偉大な詩人である。字は

子美（しび）。少陵（しょうりょう）または杜陵と号す。洛陽に近い鞏県（きょうけん）の生まれ、七歳より詩を作る。各地を放浪し生活は窮乏を極め、安祿山の乱に賊軍に捕らわれる。律詩に巧みで名作が多い。湖南省潭州（たんしゅう）から岳州に向かう船の中で没す。年五十九。李白の詩仙に対して、杜甫は詩聖と呼ばれる。

【語釈】*國破：安祿山の反乱によって国の都長安がおちて宮殿や町などが破壊されたことをいう。

*時：時世のありさま。 *濺涙：涙を流す。 *烽火：ここでは戦いのこと。

*家書：家人よりの便り。 *抵：相当する。 *渾：まったく。

*簪：かんざし。外からまげにさし冠（かんむり）を固定させる。

【通釈】戦乱によって都長安は破壊しつくされたが、大自然の山や河は依然として変わらず、町は春を迎えて、草木が生い茂っている。

時世のありさまに悲しみを感じて、（平和な時は楽しむべき）花を見ても涙を流し、家族との別れをつらく思つては、（心をなぐさめてくれる）鳥の鳴き声を聞いてさえ、はっとして心が傷むのである。うちつづく戦いののろしは三か月の長きにわたり、家族からの音信もとたえ、たまに来る便りは万金にも相当するほどに貴重なものに思われる。

心労のため白髪になった頭を搔けば一層薄くなり、まったく冠を止める簪（かんざし）もさすことができないほどである。

【備考】七五七年四十六歳の時、安祿山の乱で長安の敵中に軟禁されていた際、都の春景色を遠望し、自然の

悠久と国の戦乱を比べ、自らの不遇を詠じたものである。